

# Pleasure が大切

## ——『真面目が大切』試論

佐藤 真二

(駒沢大学大学院生)

『真面目が大切』はワイルド一流のウィットに満ち、喜劇の傑作とされる。しかし、単に面白可笑しいだけの劇と見られる危険もはらんでいる。そこで、この劇に表われたワイルドの思想を探ってみたい。

ワイルドは唯美主義者であったばかりでなく、人間に対しても深い洞察を持っていた。人間には善悪の両方が混在するというを、『サロメ』においては、サロメを官能を求める人間の一面、ヨカナーンを道徳を求める人間の一面として描いた点や、『ウィンダミア卿夫人の扇』における次の台詞に、それがよく表われている。

LADY WINDERMERE: ... I don't think now that people can be divided into the good and bad as though they were two separate races or creations.

そして、人間がいかに生きるべきかという問題に対しては、同じ劇の次の台詞にあるように、「自分の人生を完全に生ききる」ことこそ大切だと考えていたのではないだろうか。

LORD DARLINGTON: ... there are moments when one has to choose between living one's own life, fully, entirely, completely — or dragging out some false, shallow, degrading existence that the world in its hypocrisy demands.

そして、「人生を完全に生ききる」うえにおいて何が大切か、ということが『真面目が大切』に表わされているように思われる。それを顕著に表わしているのが次の台詞である。

ALGERNON: ... What brings you up to town?

JACK: Oh, pleasure, pleasure! What else should bring one anywhere?

この台詞は、pleasure こそが大切だと言っているのではないだろうか。

そして、この pleasure は「快楽」だけでなく、「人間にとって快いもの」と広くとれないだろうか。実際、この劇は「pleasure のドラマ」と呼びたい程、全体が pleasure に満ちている。それは、ジャックとグウェンドレン、アルジャーノンとセシリーなどの間にある「愛」であり、アルジャーノンに代表される「食べることを楽しむこと」であり、そして、ワイルドにとって特別に大切であった「美」である。「美」が「喜び」であることに關しては、ワイルドが敬愛したキーツも『エンディミオン』の冒頭で次のように語っている。

A thing of beauty is a joy for ever:

このように、ワイルドは pleasure が大切だと主張したが、それはワイルドが生きた社会への反抗でもあった。というのは、ヴィクトリア朝の社会では、因襲的な道徳等が人間を縛りつけ、人間が伸びやかに生きることを妨げていたからである。因襲的な道徳に対するワイルドの非難が次の台詞に表われている。

JACK: ... a high moral tone can hardly be said to conduce very much to either one's health or one's happiness. ...

そして、ワイルドはそのような社会において、権力や特権を独占していた上流社会をも諷刺している。ワイルドは社交界に出入りし、上流社会の人間の実情を知っていたが、上流社会の一員ではなかった。そのため、そこにいる人間を一步さがって冷静な目で観察することができた。それゆえ、彼は切れ味の鋭い諷刺精神を持つことができた。しかもワイルドは、喜劇という形式をうまく利用し、楽しみと笑いを提供しながら、真実をつき、諷刺をしているのである。このように、人間を圧迫する社会や権威者に反抗し、それを笑いとばす精神こそ、真の喜劇精神ではないだろうか。

このように『真面目が大切』には、人生を完全に生きるには pleasure が大切だとするワイルドの思想がよく表われているように思われる。『真面目が大切』は、その思想を實現した理想の世界なのではないだろうか。

こうしたワイルドの思想は、『つまらない夫』における次のイリングワース卿の台詞に一層明確に表現されている。尚、『ドリアン・グレイの肖像』においてヘンリー卿もそれとほとんど同一の言葉を語っている。ワイルドはその言葉がよほど気に入っており、またそれが彼の主張したかったことなのではないだろうか。

One should sympathize with the joy, the beauty, the colour of life. The less said about life's sores the better.